

幕末の大儒学者

# 岩村町 佐藤一斎



1772年～1859年

佐藤一斎は江戸浜町の岩村藩の藩邸で生まれた。幼少の頃から読書好み、武術に励み、小笠原流礼法を身に付けるなど武士としての素養を積んだ。書は父親譲りの才能を発揮し、十二、三歳の頃には成人と変わらないほどの才能を現し、天下で一番すばらしい人物になろうと志して聖賢の学(儒学)に専念した。



一斎七十四歳の書

儒学は孔子に始まる中国古来の政治、道徳の学問である。

寛政二年、二斎十九歳で藩の仕事に就き、四歳年上の第三代岩村藩主松平乗蒔の三男衡と兄弟のように仲良く接した。一斎は二十歳の時、事情があつて職を免ぜられたので、翌年、儒学の学問に打ち込む決意で大阪・京都に出かけた。大阪では懷徳堂中井竹山のもとで陽明学を学び、その後、幕府の公的学問である朱子学の本家、林簡順(林家七世)の門に入った。林簡順には跡継ぎがいなかったため、簡順亡き後、松平衡を養子として迎え、八世大学頭・林述斎として門下生の指導に当たらせた。二十二歳の二斎は改めて述斎の門下生となった。その後、二斎は三十四歳で塾長となり、述斎の片腕となつて補佐し、多くの学生の教育に努めた。

一斎が七十歳の時、述斎が七十四歳で没し、幕府は二斎を昌平坂学問所の儒官に任じた。二斎は、三千人とも言われる弟子達を育て、人材を全国に送り出した。

一斎の教えは、幕末から維新に至

る歴史的大転換期に活躍した多くの有能な人々に多大な影響を与えた。吉田松陰、勝海舟、坂本竜馬などは二斎の孫弟子にあたる。

その教えを書いたのが二斎が円熟した後半生のおよそ四十年にわたつて筆録した随想録『言志四録』(言志録・言志後録・言志晩録・言志叢録)である。

『言志四録』は四巻・千百三十三条からなるもので、その内容は学問・修養・教育道徳・読書・法律・政



『言志四録』

治・軍事・養生等々、多方面にわた

## 語録抄

分を知り 然る後に足るを知る (言志録四十二)

(自分のおかれてある立場を自覚し、言行を律してゆけば、現状で満足することを知る)

春風を以て人に接し 秋霜を以て自ら肅む (言志後録三十三)

(春のさわやかで温かい風のような態度で人に接し、秋の霜のような厳しい態度で自分と向き合い自分を慎むことが大事である)

石重し 故に動かず 根深し 故に抜けず 人は常に自重を知るべし (言志晩録二二三)

(石は重いから動かない。大木は根が深く張っているから抜けない。人もこれと同じように自分の言動には自重して、軽々しく振る舞わない)

我れ自ら感じて 而る後に人々に感ず (言志叢録一一九)

(何事も、まず自分が感動しなければ、他人を感動させる事などできない)